

毎日新聞 2006年9月23日 朝刊掲載

近聞遠見

岩見 隆夫

「偏信を捨て兼聴せよ」

来週、新首相に就任する安倍自民党総裁の若さ、〈52歳〉に全国民の熱い視線が注がれている。期待と不安の両方と言っていい。今後、どちらがふくらんでいくのか。

父親の安部晋太郎が52歳の時は、初入閣の農相を経て自民党国対委員長、議員歴16年、外相のなるのは58歳である。それでも早いほうだった。

議員歴13年で首相、がいかにもスピード出世かわかる。

〈「若さ」はもちろん大切な要素である。しかし、政治とりわけ外交の世界では「経験に裏打ちされた老獪さ」も必要である。要は若さと経験と実績のバランスをどうとるか〉

と書いたのは、晋太郎の異父弟、西村正雄だ。西村は旧日本興業銀行の最後の頭取、第一勧銀、富士銀との3行統合を仕上げ、メガバンク時代を開いた金融界の実力者、論客でもあった。8月1日、心臓マヒで急死、73歳。

死の直前、〈次の総理になにを望むか〉というタイトルの論文を世に問うた(「論座」7月号)。先の引用はその一部である。異父弟の無念を晴らすかのように、甥の安倍に首相の座が近づいていることを実感しながらの執筆だった。思いのこもる遺言である。

西村は書いている。

〈私は1998年8月、小渕恵三さんが総理に就任された時、当時のマスコミの評価があまりにも低かったので、この言葉を贈り、直言できる有能なプレーを持つように進言した。今秋選出される次期総理についても、この言葉を肝に銘じ、聞くべきは聞き、挙党一致体制で取り組んでほしい〉

この言葉とは、

<偏信を捨て兼聴せよ>

である。偏信は一人の言うことだけを信用すること、兼聴は多くの人の率直な意見に耳を傾け、そのなかから、これかと思う意見を採用すること。度量の広さを意味し、中国の古典「貞観政要」にある。

西村はさらに、政治の理念を説き、内政、外交の緊急課題に細かく触れ、小泉政治には懐疑的な立場から、

<無条件に引き継ぐのか、修正して引き継ぐのか、修正するなら何をどう変えるのか>

と選択を迫った。

この格調高く、含蓄に富む論文には、

「肉親ならではの諫言だ」

と政官財など各界から賞賛の声が上がり評判が広がった。

西村は中曽根康弘、宮沢喜一、森善朗の歴代首相や親交の深い藤井裕久元蔵相らにも論文を送ったが、藤井あての書面には、

<・・・内容はかなり抑えた積もりですが、甥の安倍晋三の支持者が読めばショックに感じる部分もあると思いましたので、予め晋三には手紙で『ここに書いてある内容は君に対する直言であり、故安倍晋三が生きていれば恐らく同意見と思うので、良く読むように』と伝えておきました>（原文のまま）

としたためであった。

<兼聴>は生やさしいことではない。率直な意見を言うすぐれたブレーンがいるかどうか、次にそれに傾ける耳があるかどうか。安倍は未知数だ。安倍をよく知る塩川正十郎前財務相は、

「しゃべり方が早すぎる。人が話している最中に口を挟もうとする。おじいさんの岸さん（信介・元首相）は最後までじっと聞いてから、口を開いた。もっと聞き上手にならんと」

と忠告するのだが。

<兼聴>を求めた西村の直言に、安倍がどこまで謙虚に応じるかは、まもなく明らかになる党・内閣人事の枝ぶりに最初の答えがある。 (敬称略)